

和歌に見る『狭衣物語』享受の一例―「虫明の瀬戸」と「唐泊」

高野瀬 恵子

六条斎院宣旨の手になると言われる『狭衣物語』は、『源氏物語』の影響が色濃い中にも独自性が見られる面もあり、ヒロインの一人飛鳥井君の入水の舞台として、「虫明の瀬戸」というそれまでの文学には登場しなかった土地（地名）を選択したことがその好例として挙げられる。平安末期以降、歌枕となった「虫明の瀬戸」（虫明、虫明の浦、虫明の浜などを含む）を詠んだ歌は、七十首近くあり、その中には『狭衣物語』の影響の見られる歌も少なくない。ここでは、物語享受の事例の一つとして歌枕「虫明の瀬戸」と「唐泊」について少し検討してみたい。

一、「虫明の瀬戸」と『狭衣物語』

「虫明の瀬戸」は、備前国邑久郡、現在の岡山県邑久郡邑久町の虫明湾付近で、沖の長島と本土の間の海峡とも、長島とその北部に位置する鴻島との間の水道とも言われる（注1）。リアス式海岸の虫明湾は天然の良港で、南の牛窓とともに古代からの船泊りで、瀬戸内海上交通の要衝となっていた。近世に至って瀬戸内海主要航路からはずれ、港としてはさびれたが、中世以降の歌枕の地として「虫明八景」と呼ばれる景勝地や、『狭衣物語』に由来する「扇浜」「裳掛け石」など

による。

……さは、今宵や限りなるらん、と思はんには、つらからん人だに思ひ出でられぬべし。まして、我や忘るる、人や訪はぬ、と思ひしは、をこなりけり、思ひ続け、立ちぬれば、涙の海に身はやがて動かれで、つくづくと沖の方を見やれば、空はつゆの浮雲もなく、月さやかに澄みわたりたるに、海の面も、来し方行く末見えわたりつつ、船のはるかに漕ぎ行くが、いと心細き声にて、「虫明の瀬戸へ来よ」と歌うが、いとあはれなれば。

流れても逢ふ瀬ありやと身を投げて虫明の瀬戸に待ちこころ
みむ

また、ある本に、

寄せ返す沖の白波便りあらば逢ふ瀬をそこと告げましてまし
とて、顔に袖押し当てて、とみに動かれぬほどに、人や見つけん、
と静心なければ、わななくわななく単袴ばかりを着て、髪かきこ
しなどするに、ありし御扇の枕上なりけるが、手にさはりたるに、
心騒ぎて取りつつ見るに、涙に曇りて、はかばかしうも見えぬを、
墨のつやばかり見えて、只今書きたるやうなるに、面影さへふと
思ひ出でられたまひて、この世にはまた、見たてまつるまじきぞ
かし、只今、かくなりぬとも、知りたまはで、いづくに、いかに
しておはすらん、寝やしたまひぬらん、さりとて寝覚めには、お
のづから思し出づらんと、いみじき心惑ひにも、硯をせがいに取
り出でつつ、この扇に物書かんとするに、目も涙にくれ、手もわ
ななかるれど、

の名が残る。『角川日本地名大辞典（33岡山県）』は地名の由来として、「夏の夜の浜辺は海中の夜光虫が光り、その明りが美しいことによる」といわれる」と述べるが、これは歌枕として「虫明」という表記が固まった後に言われたことであろう。というのは、『狭衣』は「むしあけ」と表記しているが、『狭衣』成立に近接した時期の歌に「むさけ（の瀬戸）」を詠んだ歌が見られる（『肥後集』及び『散木奇哥集』。詳細は後述）こと、「虫上」と表記した例が見られること（後述する蓮禅の詩及び中山忠親『山槐記』治承三年六月二日条 注2）から、「むしあけ」或いは「むしやげ」などと呼ばれた地名であったのではないかと考えられるのである。邑久郡の西側の赤坂郡には、中世期に「むさ（牟佐）」の地名があり、「むさかみ（牟佐上）村」「むさしも（牟佐下）村」などの名も見える（注3）。そこは現在の岡山平野の北東部、旭川の左岸であり、更にその東の吉井川の南東に「むしあけ」が位置しており、地名の関連を感じさせる。

この「むしあけの瀬戸」或いは「むさけの瀬戸」が文学に登場する最初の作品は、現段階では『狭衣物語』と考えられる。主人公狭衣に救われてその愛人となった飛鳥井君が、乳母に囮られて道成の手で強引に筑紫へ向かう船に伴われたが、彼を拒み通して入水を決意する、巻一の最終部である。以下、引用は新編日本古典文学全集『狭衣物語』

早き瀬の底の水屑になりきと扇の風よ吹きも伝へよ、
とも言ひ果てず、人のけはひのすれば、落ち入りなんとて、海の底をのぞく。ただ、かばかりにてだにも、いと恐るしきに、わななくわななくうつ伏したまふめりとぞ。

巻二で、狭衣は乳母子の道季から兄・道成の入水した妻が飛鳥井君ではないかと知らされ、上京した道成の口からその状況を詳しく聞き、女君の遺した扇を手にする。この時、道成は「唐泊と申す所にて、大式の船にあからさまにまかりてさぶらひし間に消えうせにし。あさましう海に落ち入りぬるとなん見たまへし。」と、入水の場所は「唐泊」だと述べる。

この扇は見知りたりけるなめり。あはれ、いかばかり思ひけん
と思しやらるる涙の水脈になりぬべし。

唐泊底の藻屑も流れしを瀬々の岩間もたづねてしがな
かひなくとも、なほかの跡の白波を見るわざもがなと思せども、
心にまかせぬありさまなれば、いかがは。光源氏の須磨の浦に
しほたれわびたまひけんさへぞ、うらやましう思されける。

あさりする海人ともがなやわたつ海の底の玉藻もかづき見
るべく
（中略）

顔にあてて泣きいりける涙の跡はしるくて、絵どもも洗はれたるを、我も流しそへたまふ。

涙川流るる跡はそれながらしがらみとむる面影ぞなき

「唐泊」は『源氏物語』でも玉鬘の上京の描写に登場する場所で、播

磨国印南郡、現在の兵庫県姫路市福泊または同市的形に比定されている。「虫明の瀬戸」よりも都寄りである。巻一では飛鳥井君は「虫明の瀬戸」で入水したように受けとれるが、巻二によれば、女君が船上から姿を消した場所は「唐泊」であって、女君は「虫明の瀬戸」の名を聞いた場所に入水したものの、そこはまだ「唐泊」であったということになる。しかし、『狭衣』の読者が女君入水の場として意識したのは、一般的には「虫明の瀬戸」であったと言える。前述のように、「虫明」には『狭衣』に由来する名所が遺っており、また「唐泊」は歌枕としては「むしあけ（の瀬戸）」に比べて歌が格段に少なく、重複採録の歌と『狭衣』の歌を除けば二十首程度しか見られないからである。

二、「むさけの瀬戸」と歌枕「むしあけの瀬戸」

さて、こうして文学に登場した「むしあけの瀬戸」は、十二世紀半ば頃から歌枕として意識されたようだが、しかしそれは必ずしも『狭衣』の力によるものとは言えないであろう。「むしあけの瀬戸」と同所を指すと見てよい「むさけの瀬戸」が、『狭衣』成立と極めて近い時期から歌に詠まれるようになったからである。

まず、摂政関白・藤原師実に仕えた女房歌人肥後の家集に次のような歌がある。

つくしへゆくみちにむさけのせとといふところにかねのあ

える「古き寺」との関連が想像される点が注目される。

肥後の次に「むさけの瀬戸」で歌を詠んだのは源俊頼である。

むさけのせとといふ所にてよめる

たのもしやむさけのせとをいる程はたつしら波もよらじとぞ思

(『散木奇哥集』768)

この歌は、俊頼が父の経信の太宰府赴任に同行した折のもので、その詠作年次は嘉保二(1095)年の下向から、永長二(1097)年経信が任地に没した後に上京するまでの間と考えられる。この歌は『散木奇哥集』では巻五の「旅宿」の部にあり、経信死後の上京の旅を綴った巻六「悲歎部」ではないことから、下向した折の歌とも考えられるが、前後の歌が下向とも上京ともとれる配列であるので、下向時か上京時かは決定しがたい。どちらにしても肥後の歌から数年後のことである。この歌では「鐘」も「寺」も詠まれず、また地名「むさけ」から言葉の上の遊戯性に関心が向けられており、『狭衣』の悲劇的な物語世界との関連は見られない。

こうした肥後や俊頼の「むさけの瀬戸」詠の存在は、瀬戸内海上交通の要所の名としての「むさけ」乃至「むしあけ」が、受領階級を中心として貴族層にある程度広まっていたことを想像させる。一条朝の頃から物語のために紀州までも出向くようになったり、「潮湯あみ」のために摂津・播磨などに女性までが出向くようになっていた等の状況も背景にあつて、こうした土地や地名への関心が人々の中にあり、それ故に『狭衣』作者は飛鳥井君の入水の舞台として「むしあけの瀬戸」を取り入れたのであろう。そして、物語に語られ、歌に詠まれる

るをうちならしなどするをきよて

おとたかきむさけのせとのいしかねはなみのよるうつにや
あるらん (『肥後集』174)

これは肥後が父或いは夫に随つて筑紫へ下つた折の歌と考えられる。肥後の素性については森本元子氏の研究(注4)によりほぼ明らかになっており、父は肥後守(一説に肥前守)藤原定成、花山・一条朝の伝説的歌人・藤原実方の孫にあたる人物である。「肥後」という女房名は父の官職によると考えられるが、一方で彼女は肥後守及び常陸介を勤めた藤原実宗の妻であった。従つて、肥後の筑紫への下向は可能性として二回考えられる。定成の肥後守赴任の時期は未詳であるが、実宗については概ね永保年間から寛治四年ごろまでの時期(ほぼ1080年代)に絞られる(注5)。集には「をやのもとをはなれてとをきほとへゆく」との詞書を持つ歌(167番)があり、夫に随つて筑紫下向が想像される。また筑紫で詠まれた歌(133・170番)もあり、その詞書と歌からは父に随つた折のものか夫に随つた折のものかは不明であるが、しかし二度にわたる下向を思わせる表現も見られない。よつて肥後の下向は夫に随つた折の一回だけではないかと私は考えている。とすれば、肥後が「むさけの瀬戸」で歌を詠んだのは、早ければ永保年間、遅くとも寛治年間の初頭と考えられ、延久・承保年間と考えられている『狭衣』の成立から、ほんの数年後である可能性がある。しかし、歌は全く『狭衣』との関連が見られない。また、この肥後の歌の「鐘」は、後述する僧・蓮禪の詩に詠まれた「寺」の「鐘」や、『夫木抄』『玉葉集』等に採られた平忠盛の歌の詞書に見

ことを通して、「むしあけ（の瀬戸）」は歌枕となつてゆく。

十二世紀に入り、「むしあけの瀬戸」の詠として後世に広く知られる歌が詠まれた。それが『玉葉和歌集』に収録された平忠盛の歌である。

備前守にてくだりける時、むしあけといふ所のふるき寺のは

しらにかきつけ侍りける

平忠盛朝臣

むしあけのせとのあけぼのみるをりぞ都のこともわすられにける

(『玉葉集』1217、『刑部卿忠盛朝臣集』37)

忠盛が備前守に任じられたのは大治二年(1127)末というから、その翌年あたりに備前に下向した折の詠作であろう。この歌は『私家集大成』所収の『忠盛集』(忠盛II、155番)では、三句が「みるときは」四句が「宮宮のことぞ」とあつて微妙に異なるが、『経盛集』(112番)では『玉葉』と同じ「みるをりぞ都のことも」となっているから、こちらのほうが正しいであろう。「虫明」では現在でも「二百十日頃に湾を望めば、瀬戸の中央から昇る朝日が、辺りを神々しく照らし出すのを見ることができ」という(注6)。「むしあけの瀬戸」として現地で詠まれた最初の詠であり、「曙の名所」としての「虫明の瀬戸」を知らしめた歌である。

そしてこの歌の直後と言つてよい時期に、これもまた現地で詠まれたのが、次の蓮禪の詩である。

虫上狭渡上古寺 同人(釈 蓮禪)

楓柳江頭舟宿辰、枕涯晚寺影淵淵、

晴沙月照庭無夜、白浪花飛砌有春、

鐘響不驚林底鳥、 仏恩暗浴水中鱗、
檀那昔日利生願、 一札征人結善因。

〔本朝無題詩〕・「旅館 付 路次」 注7)

蓮禪は俗名・藤原資基、生没・出家年時など未詳であるが、応徳元年(1084)誕生との見解もある。漢詩人として和歌における西行に比される人物で、自ら「筑前入道」と称し、生涯に三度筑前に下向しているという(注8)。この詩では、題中の「古寺」が忠盛の歌の詞書「ふるき寺」と同じ寺をさすと思われることばかりではなく、「枕涯」や「鐘響」の句に、肥後の歌の「鐘」との繋がりが見出されよう。

肥後・忠盛・蓮禪の三人の詠作からは、「むしあけ」にはおそらく「枕涯(みぎわにのぞむ)」と表現されるような寺があり(鐘楼も海から見えるような場所にあったか)、それが程度知られていたらしいことが想像される。明治に発行された『大日本地名辞書』第三卷(中国・四国)は、「国志云」として「等覚寺」なる真言宗の寺を挙げており、本間洋一氏も『本朝無題詩全注釈』でこの寺名を挙げているが、今のところ確定はできない。また、忠盛の場合、歌われた内容が寺や鐘に全く関わりがなく、ひとえに美しい曙の景を称賛し、それが結果として「むしあけの瀬戸」の歌枕化を決定的なものにしたと言えるだろう。以後、歌枕として題詠で詠まれるようになると、当然ながら寺や鐘のことはまったく触れられなくなる。

十二世紀で、「むしあけ」が詠まれた例としては、次に『為忠後度百首』(保延元年1135頃)の歌がある。

いそぐともせとのみやつきこゑとめよむしあけのまつにほととぎ

指摘できるのである。こうして「むしあけの瀬戸」は引き続いて歌に詠まれるようになり、おそらく忠盛の歌によって歌枕として意識されるに至ったものであろう。

三、歌枕「むしあけの瀬戸」の歌と『狭衣物語』

こうして十二世紀半ば頃から歌枕化した「むしあけの瀬戸」は、俊成らの歌を経て、後鳥羽院をはじめとする『新古今集』の歌人達、とりわけ定家・雅経ら撰者たちに積極的に取り上げられていく。

忠盛の息・経盛の寿永元年(1182)成立の家集には、「ふるき堂の柱」に書かれた前掲の曙の歌を示した(112番)あとにこのような歌が見られる。

備前守にて下向のとき、此所にとまりてよまれたるよしをな
むかかれたりけるをみ侍りて、そのかだはらにかき付けはべ
りし
はまちどりむかしのあとをみるからに涙に袖をぬらしつるかな

〔経盛集〕113)

この歌は父の筆跡を千鳥の跡に喩えた常套的な詠みぶりであり、また歌に「むしあけ」が直接詠み込まれてはいないが、「むしあけ」と「ちどり」を結びつける一つの契機になったと思われる。

また、『経盛集』成立と同じ頃の『実家集』にも次のような歌がある。

すなく 〔為忠後度百首〕257、「船中郭公」

この百首和歌は忠盛や蓮禪の詠作の三・四年後のものと思われるが、肥後の「むしあけの瀬戸」詠以来のこれまでの詠歌とは異なり、題詠で「むしあけ」が詠まれた最初の例と思われる。

さて、ここまでの「むしあけの瀬戸」の歌枕化の流れは、次のように整理される。「むしあけ(または「むしやげ」)の瀬戸」は、難波から筑紫に至る瀬戸内海上交通路において船の往来の多い要衝の一つであり、その奥の虫明湾も天然の良港として停泊する船が多かった。そのため、筑紫に往来した受領層などには比較的知られた地名であったと思われる。『源氏』の影響を強く受けながらも独自性を模索する『狭衣』において、薄幸の女君の悲劇の舞台として新鮮な地名が求められたとき、作者・六条斎院宣旨は、いくつもあつた瀬戸内海上の船泊や「〇〇の瀬戸」のなかから、その時点では和歌・物語に現れることのほとんどなかった「むしあけの瀬戸」を採り、新鮮味を出そうとしたのである。そして、その『狭衣』成立ときわめて近い時期に、物語に採られたことを意識したか否かは定かではないが、『狭衣』作者よりも一代若い歌人らが現地地「むしあけの瀬戸」を詠むようになった。その歌人たち、肥後と俊頼も、和歌の表現に新鮮味を求める意識が強く見られる歌人であり、そのため彼らの歌の表現は同世代または彼らよりも少し若い世代によって模倣される傾向があつた。『金葉集』撰者となつた俊頼の歌壇に占めた位置は敢えて言うまでもなく、ここでは詳しい論証は省くが、肥後の歌も源頭仲や源仲正(仲正は「為忠後度百首」の歌人の一人)らによって積極的に模倣されている例を

かむだちめあまたいつくしまへまゐることありしに、うし
まどのとまりにて、人人うたよみしに

みやこにていかにかたらんむしあけの せとのいりえのまつの
たえまを (356、『夫木抄』12194)

こちらもほぼ現地での詠と言つてよいが、この歌の「いりえのまつ」も、続く俊成の歌とともに、定家らの歌に影響を与えたと考えられる。

やよいかにむしあけの松の風に又はるかにしかの声おくるなり
〔長秋詠草〕243・『夫木抄』4688、題は「夜浦聞鹿」
何となく心ぞとまるそれとみてこぎはなれゆくむしあけの松

〔俊成五杜百首〕491)

この俊成の二首は単なる叙景歌ではなく、『狭衣』を踏まえているように感じられる。「やよいかに」の歌の下句「はるかにしかの声おくる」とは、「遠くへ妻恋の鳴き声を送る」ということであろうから、飛鳥井君の入水を前にした「つま(狭衣)恋ひ」の心情を踏まえていると考えられよう。また、「それとみて」「心ぞとまる」「むしあけの松」とは、ここに飛鳥井君は身を投げたかと心に留まるの意が込められているようにも思われる。そのように読みとれるとすれば、俊成は叙景歌として詠まれて来た「むしあけ(の瀬戸)」に、先行歌の表現「松」を踏まえつつ、『狭衣』という物語世界を重ねて詠む方法を、初めて採つたことになる。

そして定家の詠んだ「むしあけ」「むしあけの瀬戸」の歌は次の通りである。

①むしあけの松ふく風やさむからん冬の夜ふかくちどりなくなり

『拾遺愚草』員外・732・「冬 千鳥」、『夫木抄』6818)

②おもふことあらばいそがふなでしてむしあけのせとは浪あら
くとも (『拾遺愚草』491・早率百首 雜)

③しるべせよむしあけのせとの松の風ほか行く浪のしらぬ別に

(『拾遺愚草』1169・内大臣家百首 恋 寄名所)

④むしあけの松としらせよ袖の上にしほりしままの浪の月影

(『拾遺愚草』1865・院句題五十首 旅泊月、『定家自歌
合』168)

定家の「むしあけの瀬戸」詠については、近藤美智子氏が「定家の歌
における『虫明の瀬戸』」(ノートルダム清心女子大学『古典研究』
25号 注9)において既に論じられている。氏は『拾遺愚草抄出聞
書』の注をも引用しつつ、②③④の歌にはそれぞれ『狭衣』の影響が
見られると述べている。すなわち②は飛鳥井君が欺かれていたとも知
らず「狭衣に逢いたい一心で舟に乗り込んでいく時の歌」(前掲論文
による。以下同じ)、③は「ほか行く浪のしらぬ別に」に飛鳥井君が
「狭衣大将とは別々の流れに押し流されてしまった運命を、半ば諦め
ながら、せめて我身の終りを迎えた場所だけでも知らせて欲しいと願
う」歌、④は「むしあけの松」は「むしあけで待つ」に通じ「不変の
心を抱いたまま、袖の上の涙を月に映すのはやはり飛鳥井姫であろう」と
述べている。近藤氏は、定家が『物語二百番歌合』で『狭衣』に『源
氏物語』と並べ得る程の評価を与えていたと考えられる所から出発し
て、定家の「飛鳥井」「飛鳥川」「涙川」の詠は『狭衣』の本文や所
収歌に強く影響を受けているのが特徴であると述べ、次いで「むしあ

浪たかきむしあけのせとにゆく舟のよるべしらせよおきつしほ風

(『新勅撰』・雜四・1324、『秋篠月清集』997、『歌枕

名寄』8047)

むしあけのせとのしほひのあけがたになみの月かげとほざかるな
り (『秋篠月清集』64、『玄玉集』114)

なみたかきむしあけのせとのかぢまくらみやよにきかぬはまかせ
ぞふく (『秋篠月清集』683)

まてとしもたのまぬいそのかぢまくらむしあけのなみのねぬよ
となふる (『秋篠月清集』1444、『水無瀬恋十五首歌合』99)

「舟のよるべしらせよ」「みやよにきかぬ」「ねぬよとなふる」等の
表現は『狭衣』の物語本文を踏まえていると言ってもよいであろう。
また、定家や次に挙げる俊成卿女の歌と比べて気付かされるのは、雅
経と良経の歌には「松」や「松ふく風」が歌われないうことである。『狭
衣』本文には「松」や「松風」が書かれてはいないことを思うと、解
釈のしかたによっては、雅経・良経の歌は『狭衣』本文に忠実と言え
るのかもしれない。

俊成卿女の歌は、飛鳥井君の心情に寄り添うような表現と、「松風」
を詠み込んでいる点で定家の歌と雅経・良経の歌の間に立つように見
える。

むしあけの松に秋風吹きすぎてなみだもとめぬ浪の音かな

(『俊成卿女集』155、『夫木抄』13760)

こぎはなれゆく月かげぞあはれなるむしあけの松の風のおとか

けの瀬戸」の詠に論を進めているのであるが、「むしあけの瀬戸」が
『狭衣』に取り入れられた背景や「むしあけの瀬戸」の先行歌にはあ
まり注意をはらっていない。確かに定家の④の歌には濃厚に、②③
の歌にもどことなく『狭衣』の物語世界の投影が感じられるのである
が、「むしあけの松」や「松の風」などには先行する実家・俊成の歌
の影響が見られ、飛鳥井君の悲劇を感じさせる点では、定家よりむし
る次に挙げる雅経の歌のほうが恋歌の色合いも濃いように私には思わ
れる。

かげうつすそではうきねのわれからに月ぞもにすむしあけのせ
と (『続古今』・羈旅・891、『飛鳥井集』966、『歌枕

名寄』8048)

かたしきのそでもわれからあまのかるもにすむといふむしあけの
せと (『飛鳥井集』521)

ふねとむるむしあけのせとの浪まくらむすびもあへずおきつしほ
かせ (『飛鳥井集』705)

これらの歌には『狭衣』の悲劇の舞台としての「むしあけの瀬戸」と、
入水を決意した船上の飛鳥井君のイメージが色濃く投影されていると
言えるのではないか。或いは「かたしきのそで」には、飛鳥井君を失
った狭衣大将の嘆きの姿を感じ取ることもできよう。近藤氏は雅経の
歌には『狭衣』本文の投影が感じられない」と述べ、定家の歌は「物
語との関係の色濃く反映している」としている。

このほかに、良経や俊成卿女の歌にも、『狭衣』の投影が見られる。
良経の歌は次のとおりである。

な (『俊成卿女集』解題1、『歌枕名寄』8050)

これと同様に感じられるのが、慈円の歌である。

船とむるむしあけの磯の松の風たが夢路にか又かよふらむ

(『拾玉集』4955、『水無瀬恋十五首歌合』97、『歌枕

名寄』8054)

むしあけのうらかなしくや過ぎぬらむかせによりしこゑを恋
ひつ (『拾玉集』2900)

「船とむる」のほうは、『夫木抄』・11795番に、第二句「むし
あけのはまの」の形で作者は「通具」として採られているが、これは
『夫木』の誤りであろう。

後鳥羽院も「むしあけの瀬戸」を好んで詠んでいるが、あくまで叙
景歌の感が強い歌の中に、明らかに『狭衣』を詠んだものと思われる
歌も交じる。

ちぎらねどよそのあふ瀬をたのむかなむしあけのせとの松のあら
しに (『夫木抄』12196・「寄木恋」)

うきねするね覚めの秋をながむればむしあけの月に松かぜぞ吹く
音 (『後鳥羽院御集』250)

月かげにむしあけのせとをこぎ出づればやそ島かけておくる鹿の
舟とむるむしあけの秋のはつ風にわすれがたくもすめる月かな

(『後鳥羽院御集』807)

さびしさはむしあけのせとのしほかぜに夜ぶかき月にしくものぞ
なき

(『後鳥羽院御集』1185、『仙洞五十首』216)

月にきくむしあけの松の風のおとやつねのうらにはふきまさるら
ん (右二首は『千五百番歌合』判詞)

近藤氏は前掲論文で、後鳥羽院の詠は「叙景的な傾向が強」く、『狭衣』本文にはこだわらず、情景だけを取り出して「いるとするが、一首めの「ちぎらねど」は明らかに巻一の飛鳥井君の歌「流れても…」を踏まえている。また三首めの「月かげに」の歌は、俊成の歌を踏まえており、そういう形で『狭衣』を詠み込んでいると見ることもできよう。

四、『新古今』以後の「むしあけの瀬戸」の歌と「唐泊」の歌

『新古今』以後の歌人で「むしあけ(の瀬戸)」を詠んだ歌で目につくのは、源実朝と後嵯峨院、そして十四世紀の正徹である。

よをさむみ浦の松風吹きむすびむしあけの波に千鳥なくなり

『金槐和歌集』354、『夫木抄』6819)

月ぞすむなれこし秋は夢なれやむしあけのいそのよはの松かぜ

『夫木抄』12077)

この二首の実朝の詠は師の定家等の歌を模倣していることが明白であろう。「よをさむみ」の歌は『夫木抄』で前掲の定家の①歌と並べられているが、それも道理でほとんど同一の情景が詠まれた歌である。「月ぞすむ」のほうは、澄んだ「月」と「夢」の語に『狭衣』の場面

を想起させるものがあるが、「秋は夢なれや」は西行の有名な「難波の春は夢なれや」の模倣が顕著で、物語を踏まえた歌と言えるかどうかは微妙である。

後嵯峨院の次の歌は、忠盛の「あけぼの」の詠と並んで「むしあけの瀬戸」詠の代表的なものとして知られているが、『狭衣』の物語は感じられない。

風あらしむしあけのせとの夕やみに友よびかはす夜はの舟人

『新千載集』・羈旅・763、『歌枕名寄』8053)

文永八年(1271)に詠まれたこの歌は、『名所歌枕』にも採られているが、そこでは作者を小町としている。声調などらかな美しい叙景歌であるから、愛唱されて作者の異伝が生じたものであろう。しかし、「風あらし」はこれまで頻りに詠まれてきた「寒き」「松風」の流れの上にある表現のように思われるし、「友よびかはす」は定家や実朝の歌の「千鳥」から導かれる表現である。「夕やみ」は「あけぼの」を称賛した忠盛の歌を意識して逆にしたものであろう。歌としては先行歌の表現を承けて成り立っていると見える。

これらの歌に対して、正徹の歌の中には、『狭衣』との繋がりを感じさせるものがある。『草根集』には「むしあけ(の瀬戸)」を詠んだ歌が全部で十一首あるが、次の五首には『狭衣』の本文を想起させる表現が含まれている。

①うきねとふ月にふきこす塩風も夢の関もむしあけの松

『草根集』4237)

②人の世は朝にむまれ夕暮に命かけたるむしあけのせと

『夫木抄』にはこの歌を踏まえた歌が一首次に並べられているが、当然ながら『狭衣』との関係は全く感じられない。

しほかぜはあらくもぞなるからとまりのこのうらぶねこぎいづな

ゆめ (『夫木』11990・中務卿のみこ鎌倉)

ところが、これよりも早い『栴葉集』にある次の歌は、筑紫との関係を持ちつつも『狭衣』本文を想起させる表現が含まれる。

おもかげはからとまりまでゆくなみをたもにかくるまつらさよ

ひめ (『栴葉集』623・貞算法師・「わかれの心」)

初句の「おもかげ」は、『狭衣』巻一の入水しようとする場面にある詞であり、三・四句の「なみをたもにかくる」は入水のイメージである。しかし、「わかれの心をよめる」という題と結句に「まつらさよひめ」とあることで、この歌は「韓」にむけて船出した狭手彦を慕って悲しむ松浦佐用姫の伝説を詠んだものと考えられるほうが自然であるようにも思われる。『狭衣』との関係は排して解すべきなのだろうか、それとも「からとまり」を利用して佐用姫伝説と『狭衣』とを重ねた表現でもあるのだろうか。

『草根集』の「からとまり」の歌にも、積極的に『狭衣』との関係を云々するほどではないが、『新古今』の頃の「むしあけの瀬戸」詠に通う表現が見られる。

はま千鳥やまとにもあらぬから泊から声になく塩や満つらん

『草根集』5547)

すみわぶる身はうつせみのから泊うきたる舟や此世なるらん

(同 10075)

(同 10073)
③舟つなぐむしあけのせとの松の陰うつなみくらき夜はの塩風 (同 10085)
④舟とむるむしあけのせとの浪風にいかなる夢を松のしたかげ (同 10092)

⑤舟の中をおき出でてきけば音あらしむしあけの浪に松風ぞ吹く (同10115)
①では「うきねとふ月」、②では「命かけたる」、③では「うつなみくらき夜は」、④では「いかなる夢をまつ」、⑤では「舟の中をおき出でて」が、いずれも飛鳥井君が入水を決行しようとした場面を思い起こさせる。これは『狭衣』を踏まえた歌と考えてよいのではないかと思われる。

正徹以後は、「むしあけ(の瀬戸)」はほとんど詠まれなくなる。これと逆の傾向を示すのが、「からとまり(唐泊)」の歌である。「からとまり」は『万葉集』・3670番に奈良時代の筑紫の「韓泊」を詠んだ歌があり、それが『夫木抄』(11989)にも、『五代集歌枕』(1116、1702)、『歌枕名寄』(8968)にも採録されている。しかし、平安期に「からとまり」を詠んだ歌は『狭衣』の他には見当たらない。

可良等麻里 能許乃字良奈美 多々奴日者 安札杼母伊敏尔 古非奴日者奈之

(からとまりのこのうらなみたたぬひはあれどもいへにこひぬひはなし)

このうち二首めの「すみわぶる」は、集では「むしあけの瀬戸」の詠として挙げた五首のうち②のすぐ近く（一首挟んで次の歌）である。そしてこの正徹の歌を踏まえていると思われるのが、弟子の正広の歌である。

世にすめば身はうつせみのから泊さのみによせて浪なくだきそ
（『松下集』2497）

空蟬のわが世むなしきから泊さてぞはかなき夢通ふらん
（同 3212）

このうちの二首めは特に、「わが世むなしきから（鼓々骸）」と「むなしき唐泊」、そして「はかなき夢通ふ」に、それぞれ飛鳥井君の入水のイメージと水底までも求めたいと嘆いた狭衣のイメージが感じられる。

正広と同じく正徹の弟子の心敬に、明確に『狭衣』の投影を感じる「からとまり」の歌がある。

思出づる今夜ぞなきから泊とほき扇の風も身にしむ
（『心敬集』92）

「扇の風」は明らかに巻一最終部の飛鳥井君の歌「早き瀬の…」を踏まえていよう。また、「思出づる今夜」も、「早き瀬の」の直前にある文、飛鳥井君が「さりとて寝覚めには、おのづから思し出づらん」と狭衣を思う部分を思わせる。

三条西実隆にも「からとまり」詠が四首あるが、そのうちの二首が恋歌めいた情趣を漂わせる「旅泊」の歌である。
なみ風のうきねぞからさきから泊ひとの国にもためしなきまで

（『雪玉集』5678）

（同 7605）

打ちねぬもわれからとまり舟人のゆめのゆききはやすき波路を
二首めは雅経の歌「かげうつすそではうきねのわれからに…」を思い起こさせる。

このほかに、『耕雲千首』に次のような歌がある。
むすばれぬ夢も我が身のからとまりうきねかさなる波枕かな
（868）

こうして見ると、「からとまり」の歌は、数は多くはないものの、「むしあけ（の瀬戸）」詠が下火になった後に、それに代わるようにして詠まれたように感じられる。そして心敬の歌が『狭衣』を踏まえていることが明白であることは、正徹や正広、実隆の歌もまた『狭衣』を意識している可能性があることを示唆しているだろう。そうであるとすれば、何故「むしあけの瀬戸」が「からとまり」に変わったのだろうか。考えられるとすれば、「むしあけ」よりも「からとまり」のほうが掛詞にしやすい等のことばの遊戯性であろうか。

五、まとめ

以上、「むしあけの瀬戸」の歌枕化をたどり、歌枕としての「むしあけ（の瀬戸）」及び「からとまり」と『狭衣物語』との関係を考察してみた。要点のみを整理してみると、次のようになる。

注1、『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳・馬場あき子編、角川書店）及び、『大日本地名辞書』（吉田東伍著、昭和四十五年増補版発行、富山房）などによる。

注2、『増補史料大成』による。この日の記事に前太政大臣清盛が嚴島から帰京したことが見え、民部大夫政清が旅の模様を語っている。それによれば一行はこの月七日に京を出発、十一日に「虫上」を経て「牛間戸」に着いている。

注3、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』（一九八九年）による。

注4、『肥後集』の作者とその生涯（『私家集の研究』昭和四十一年・明治書院 所収）

注5、『国司補任』による。藤原実宗は、寛治六年（1092）から嘉保元年（1094）にわたって、肥後国の「前守」または「前司」として「大記」「中右記」などに見える。また承暦二年（1078）〜四年頃は源時綱が守で、寛治二年に前守源時綱の名が

「中右記」に見える。寛治五年に中原師平が任じられたが同年に死去、翌寛治六年に藤原盛房が任じられている。

注6、後述する近藤美智子氏の論文による。

注7、本間洋一『本朝無題詩全注釈 二』（平成五年五月、新典社）より引用した。『古寺類苑』や『大日本地名辞書』等に記載された詩は、題を「虫上狭渡 岸上古寺」とし、第三句も「晴沙日照庭無夜」とあるが、ここは本間氏の校訂に従った。

注8、『平安時代史事典』（角川書店）による。

注9、一九九八年五月、ノートルダム清心女子大学国語国文学科。

一、「むしあけの瀬戸」を初めて文学に採り上げたのは『狭衣』であるが、『狭衣』成立の直後頃から、同じ場所である「むさけの瀬戸」を詠んだ歌が見られる。従って、「むしあけの瀬戸」の歌枕化は、『狭衣』によるというよりも、現地で詠まれた歌の流れによると見るべきであろう。

二、歌枕となった「むしあけ（の瀬戸）」は、おそらくは俊成あたりから、『狭衣』を踏まえて、或いは物語世界を投影して詠むことが盛んに行われるようになった。

三、「むしあけ（の瀬戸）」は、『新古今』の頃には盛んに詠まれていたが、その後は『草根集』に目立つのみで、詠まれることがまれなくなった。

四、「むしあけ」に代わるように、歌枕として「旅泊」題で取り上げられ、『狭衣』の投影も感じられるのが「からとまり」である。『狭衣物語』において、飛鳥井君の悲劇的な物語は読者を相当にひきつけたようである。飛鳥井君物語の成功は、「虫明の瀬戸」という、当時の貴族層にとってはリアリティがあつて新鮮味のある場所での入水という設定に、『源氏物語』にはない新鮮さと、「水底に沈む女」の伝統的なパターンとの融合があつたためであろう。それが和歌における「むしあけ（の瀬戸）」詠を盛行させたことも確かであり、和歌における物語享受の好例となつていると言えよう。

文中の和歌の引用は『新編国歌大観』による。

【参考文献】(文中で示したものを、注で示したものを除く)

『日本文学地名大辞典―詩歌編』(大岡信・監修、株式会社遊子館)

『岡山県の地名』(日本歴史地名大系第三四巻、平凡社)

『和歌文学大事典』(犬養 廉他編、明治書院)

境田四郎「邑久・牛窓・虫明」

(帝塚山学院大学『日本文学研究』第六号、一九七五年)

『名所歌枕 伝能因法師撰 の本文の研究』

(井上宗雄他、昭和六十一年、笠間書院)

『狭衣物語の人物と方法』(久下裕利、平成五年、新典社)

長谷川佳男「引用本文と異本を生む想像力」

(『論叢狭衣物語』3 引用と想像力)二〇〇二年、新典社)

野村倫子「飛鳥井君をめぐる『底』表現―流離と入水の多重性―」

(右に同じ)